

主イエスは弟子たちと共に、ガリラヤ地方で三年間にわたって宣教活動が続けられました。その出来事は四つの福音書に記されておりますけれども、それを見てみますとその三年間の中にはいくつかの転機といいますか、大きな節目があるのに気づかされます。本日の福音書はその大きな節目の一つであります。

主はフィリポ・カイサリア地方に弟子たちと共に出かけられ、そこで弟子たちに自分は誰であるか、自分は何者であるか、と弟子たちに尋ねられました。弟子たちは人びとが言っていることや自分たちが何となく考えていることを告げるのですが、それは主イエスにとっても満足出来る言葉ではなく、弟子たちも当を得ていると実感できる内容ではありませんでした。そしてペトロが的確に主イエスのことを告げたのでした。「あなたは、メシアです」これこそ、主イエスのことを最も正しく現したものであり、そうした心がペトロに芽生えていたことに主イエスは大変お喜びになったのでした。しかしそれはまだ、弟子たちは正しく捉えることは出来ても、民衆はまだそれが困難だったのです。民衆はただ、主イエスの不思議な業を見たい、自分に何か益になるものを得たいという考えで主イエスに従ってきておりましたので、「あなたは、メシアです」という言葉が示されたとしても正しく捉えることが出来ず、ますます大きな業を見たいという、興味本位の心しか持つことが出来なかったのです。「するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた」。これは主イエスの姿が民衆にも正しく捉えられるため、時期を待たれたのでありました。

さて、さきほど主イエスの宣教生涯において、このペトロのキリスト告白が重要な転機であると申しました。主はこのときを境に主なる神から与えられた使命、すなわち十字架につくことを初めて示されます。今まで主イエスは天国について教え、人びとの間で奇跡を行い、天国を宣べ伝えられました。しかし十字架については一言も言われたことはなかったのです。主イエスという救い主は、政治的に人びとをローマ帝国の圧政から救う、偉大なる指導者ではなく、多くの人の罪を負い、主なる神との関係を二度と切れないように結び付け、天国の約束を与える、それが主イエスだったのです。そしてこれが新約聖書を通じて与えられた福音であり、主なる神の救いの業だったのです。

しかし弟子たちは主イエスがそのような使命を持っていると言われても、正

しく捉えることが出来なかったようです。「ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた」。この言葉はペトロが政治的な指導者を願っていた、間違っても自分たちの主であるイエス様が殺されるなんて考えられない、そうしたいわば人間的な、自分の都合に合わせた救い主を作りだしていた証拠であります。ペトロはさっそく主イエスからサタンと言われ、自分勝手な救い主を作りだして、主なる神の救いのみ業を、主なる神の御心を従順に聞こうとしない態度を注意されたのでした。

以前、日曜学校の子供に主なる神はどんな方か、と聞いてみますと、様々な姿を語ってくれます。やさしいとか、きびしいとか、あるいは創造力を豊かに働かせて、その姿を想像してくれる子供もいます。自分なりに主なる神の姿を捉えるというのは大切なことです。自分に働きかける主なる神を実感することであるからです。そして私達たちはそこから一步進んで、自分の中に描いている主なる神の姿が、どういう存在であるか、よく確かめてみる、本当にそれが主なる神の御心を従順に聞いているものであるか、もしかしたら自分の都合のよい姿ではないか、自分で主なる神を作りだしているのではないか、それをよく振り返るべきことが教えられています。ペトロは救い主の姿を自分で勝手に描いていたのです。自分に働きかける救い主を心と体で受け止めるのではなく、救い主はこうあってほしい、自分のもとに来られる救い主はこういう姿であるべきだ、という自分の都合をもって描いた救い主と主イエスを合わせて見てしまったのです。それが主イエスが言われたサタンということだったのでした。主は愛する弟子をもサタンと呼び、主なる神の御心を従順に聞く大切さ、主なる神の存在を本当に正しく受け止める重要さを教えられました。私達それぞれの心にあります主なる神の姿を振り返り、御心を正しく受け止める信仰生活を送っていきたいものであります。